

GR 白雲山 とりゐ



40

昭和52年10月1日

宗教法人
白雲山鳥居観音

表紙の説明

白雲山 鳥居観音全景

紅葉の真盛り

中に点在する堂、塔がよく調和している。
自動車道、遊歩道が通じ参拝に便利。
健康づくりに好適な環境である。

とりゐる第40号目次

表紙	白雲山の秋全景	
道光禪師御法話(其二十二)	一
水野梅暁師略歴	松田江畔	三
鳥居観音の鐘銘	松田江畔	四
西遊記(其三十四)	岡部千三	七
田舎医者(其二十)	見川鯛山	九
大鐘楼建立協力者芳名	十一
諸奉納者芳名	十三
鳥居観音だより	十五
裏表紙	鳥居観音地図	
秋から新年行事案内		



(其の二十二)

禪の宗意から仏教を話す 前号につづく

凡夫の妄想心には、こういう真心もしくは仏心、仏性という、立派な本性をもっているという、その意味の自己の価値に自信を持つこと、それが真に、自心力の人であって、その自心力から出発してこそ、はじめて真に力ある働きができるのです。

くり返し云うようですが、

「月一つ もたぬ草葉の 露はなし」という句があります。夏の朝まだ太陽のあがらぬうち、西山にはまだ残月があるという時刻、草葉の露を見ると、露の玉ごとに、みなりっぱな月影を宿しています。その露が高くて、低くても、小さくても、大きくても、みな一つずつ月影を宿している趣きなのです。

そのように、人の身分が低くても、高くても、男でも女でも、そんなへだてはありません。みなことごとく、人は成仏すべき「真心」というりっぱな、真如の月に恵まれているということになります。したがって、凡夫が仏になれるということは、この大自覚をすべき本性をもっているということです。

仏にも、神にも、人はなるものを

など仇にもつ 巳が心を

と云うのは、この心のことであります。ゆえに仏の理想は、一切の人類を、みなこの真心に自覚させてこの世のなかを、美しい仏心生活に、浄化させようというのであります。

しかしながら、凡夫はなかなか不純な、よごれからはなれることがこんなのであります。そのように人の心が不純であれば、世の中が不純から洗われることがありません。住む人の心がうつくしくなると自然に世の中もうつくしくなるのです。

これは家庭においてもそうです。親子、兄弟、親身のものよりあいでも、お互いの心が角だらけで

あれば、針の畳に坐つたような家庭になります。他人ばかりの集まりでも、平和な心でも、平和な心で住めば、楽しい家庭となります。

今日、世の中が不純になつた、又、社会が悪化したといいますが、それは、つまり人心の悪化からきております。そこでこれを浄化するためには、清浄な仏心に目ざめるところまで反省しなければ、眞の社会浄化はできるものではありません。

そうして住む人の心が、仏心に美化されれば、その心が自然と現われてきます。

世界はそれで極楽となり、浄土となるのであります。極楽浄土はあえて遠方ではありません。お互いが仏心に生きれば、仏心の実現するところ、そこが浄土であります。それを沙婆即寂光浄土といひます。この世の中は、自我を中心として、妄心に支配されています。凡夫の心からみれば、五濁悪世をそのまま浄土として、住むことができるのであります。仏教では、こういうわけになつてゐるのです。

四

釈尊からずっと禅宗の系統で、二十八代目が達磨さまであります。これは印度のおかたで、印度から（今の中共）へ禅を伝えたおかたであります。それから二代目、三代、四代と一すじに伝わつて、五代目になつてから、その下に、禅宗が二派にわかれる事情ができて、南と北に流儀がわかれてきました。それを南頓北漸なんとんほくせんと申します。禅そのものには別ないので、ちようどお茶に千家の裏表があるように、流儀によつてちがひがあります。それでその二つにわかれた北の方の祖師を神秀禪師といい、そのお作りになつた偈のなかに、その心の浄らかさがよくあらわれております。その第一句は

「身はこれ菩提樹」

といふのであります。それはおたがいの身は、成仏のできる身であるということでもあります。

この菩提樹という木は、日本にもありますが、多少ちがつています。印度にいつてみますとたくさんある木で、丁度ポプラのような質の木です。

（以下次号）

水野梅曉師略歴

(水野梅曉追録
松田江畔編より)

旧福山藩士金谷俊三、マツの四男として明治十一年一月二日、福山市東町に出生。幼名、善吉と称す。後福山藩士で出家した法雲寺住職水野柱巖の養子となる。大正四年家督を継ぐ、十三才で出家し、哲学館(東洋大学前身)に一時籍をおき勉強した。後に京都大徳寺高桐院高見裡厚居士について修業、次いで根津一氏の知遇を得、伴われて上海東亜同文書院に学ぶ。業を卒るや、曹洞宗開教師となり、明治三十八年、湖南省長沙に僧学堂を開設して布教す。明治四十三年頃、松崎鶴雄氏、塩谷温博士等に長沙留学を勧め、松崎氏は王闔運の門に入り、説文学其他を、塩谷博士は葉德輝について元曲を専攻した。後に大谷光瑞師の知遇を得て、本派本願寺に転じ、中国研究にあたり、中国布教権問題を始め、日支仏教徒の親善連絡につくす。この間光瑞師の侍者として遠く、ハワイ、蘭印各地を遊歴、大正三年東方通信

社の設立されるや、その調査部長として「支那事変」誌を主宰した。大正十二年関東大震災により通信社の縮小に伴い、日華実業協会、外務省の援助を得、大正十三年支那時報社を創立し、専ら中国の時事問題を取扱った専門誌を発行す。同十四年秋、日華仏教徒を中心とした東亜仏教大会が東京芝増上寺に開かれるや、日華仏教連絡員に推され、翌年秋京都東福寺派管長尾関本孝師を団長とし、日本仏教各宗幹部を網羅した。日本仏教徒訪華視察団を組織し、中国南北各地を歴訪、彼地仏教徒との親善交かんにつくす。満州国の建国に伴い日滿文化協会の創立されるに当り、その理事に挙げられ、満州国文化に貢献した。

終戦後玄奘三蔵法師靈骨塔建立のため、日本各地を遊説して、遂に埼玉県慈恩寺に建立し、悲願を達成した。又同県名栗村鳥居観音及福井市に分骨の勞をとった功績も大である。

昭和二十四年十一月廿一日慈恩寺にて示寂さる。

享年七十四才、鶴見総持寺の宝域に葬らる。

鳥居観音の鐘銘

松田江畔

（録号り）
正七月よ

五月十四日は鳥居観音の鐘樓が完成し、その落慶式が盛大に挙行された。私はこの企画の初めから相談に乗り、多くの方に浄財寄附もおすすめしたので、この日はかなり待たれた。小学生が遠足に出発するように、喜び勇んで出掛けた。

平沼桐江先生が鳥居観音を建立を志してから、すでに四十年の歳月を経過しているが、私が初めて名栗へ行ったのは、これも又三十年の昔である。

その頃鳥居観音の山内には、奥の院と称する所に小さな観音堂が建てられ、（設計者中里清五郎氏）それより少し下ってきた所に地藏堂が建っていた。その二つだけが完成していて、自宅のアトリエには未完成の仁王尊が製作途中であった。

仁王尊が出来上ると仁王門を建て、七観音ができると本堂を建て、玄奘三蔵靈骨塔、鳥居文庫、写経

塔、百尺の大観音（救世）太玄門（玉華門）及地球愛護平和観音、鐘樓等等、が次ぎ次ぎと建立されていった。十万坪以上の山内に、これらの建物が配置され、百年以上の杉松の巨木八千本と、桜、楓、どうだん等数万本が、ぎっしりと植っている。春は花と新緑、秋は紅葉と、この二つの季節が一番うつくしく装うが、夏の情涼、冬の雪景もよい。

私は水野梅暁先生の遺品整理ということで、毎年名栗村へ通ったが、いつしかこの鳥居観音建設のお手伝いすることになった。平沼桐江先生夫妻の熱烈な信仰で、立派な仏像が次ぎ次ぎと完成してゆくのをしている、私のお手伝いする場合も数多くある。無い智慧を絞って深く参画していると、他人事ではなくなってくる。

そんなわけで、私の書が相当多く、この白雲山、鳥居観音に残る事になった。永久に残るか、或は半永久であるかわからないが、とに角後世に残ることはまちがいあるまい。

随時見ることの出来るものを挙げてみると、鳥居

文庫にある写経五巻、これは一巻の長さが二十米位である。次に玄奘三蔵靈骨塔地階にある大理石の壁面の書で、趣意書と寄附者芳名、これはタテ三尺、ヨコ五尺位のもの。次は玄奘三蔵法師銅像の題字。次は百尺観音の建っている建物の中で、入口を入れて受付に近い右側壁面に、銅版に刻して嵌め込まれている大観音縁起で、タテ三尺、ヨコ四尺位の凸字である。

次は今回完成された鐘楼の外側、五つの面の大理石に、鐘声和白雲を正面とし、四面に観音経偈をそれぞれ隷書で大書してある。次はその鐘楼の大梵鐘の銘文で、文字は方二寸位の大きさの漢文である。鐘銘は御承知の様に前文（本文）と銘とからなっている。かなまじりにすると荘嚴さと美しさが充分に出ないので、前例に随って漢文であり、楷書で揮毫した。

鐘 銘

謹んで慈母の遺訓を承け、白雲山鳥居観音本堂及び諸諸の施設を建て奉る。自から仏像を刻し、尽く

之を安置す。三十余年にしてほぼ完成を見る。余齡八秩を踰（こ）ゆる加護、漸く回生を得たり。便はち宿願達成の機至る。仍て工匠に命じ鴻鐘を鑄す。銘に曰く。殷殷たる華鯨。山を渡り谷を越え。千里相応じ、万邦僉（み）な肅しむ。慈悲泉の如く。草木愛育す。坤球和平。冀くは輯睦に臻（いた）らんことを。

私はこれに書者名を入れないようにしようと思つたが、桐江先生のおすすめで、江畔居士謹書と書いた。

この外写経塔の中にも若干の書を奉納してある。今回自分の書いた書を見て、何故にもっとうまく書けなかつたかと思うが、これはどうも致方がない。書く時には心を空しくして、誠心誠意書いたので、あきらめるより外はない。やはり直しがきかないのである。

当日の落慶式には、是非参列したいと申込まれた方も、その日になって都合のつかない人も出来て、

清水からは九人となった。久保田江濤、杉山普水、の両君が一台つづつ運転し、正鋒研究室を出発したのは五時二十分。およそ四時間で到着する予定を立てた。

一台は東名高速道路―首都圏高速道路―中央高速道路八王子迄―昭島青梅経由―名栗のコースを通りもう一台は、東名高速道路終点―八号線経由―関越高速道路―川越狭山飯能市経由―名栗と別の道をえらんだが、前者は九時四十分、後者は十一時到着した。清水市から名栗までの最短距離は前者のコースをえらぶのが早道であるとわかった。玄奘三蔵塔より下った曲り角に建立された鐘楼の前では、すっかり準備が整い、予定の時間開式された。

五月半ばというに、真夏の様な強い日ざしである六百余名の参列者は、多く木陰に入ったが、正面と来賓席は相当に暑い。背を汗が伝うのがわかる。式は滞りなく進行し、順番に随って鐘を撞いてみた。みごとに音色でごうんと鳴り、余韻が暫くはつづく新緑の山山にこだまして、まことにのどかである。

私は铸造された文字いかんと、鐘を廻りながら眺めたが、頭上はるかに上にあるためよくわからない。明朝脚立を借りてよく見たり、拓本もとりたいと思いつながら鐘楼を下りた。

式が終ると参列者はそれぞれ山内へ散ってゆく、鐘楼から五十米ばかり登れば玄奘三蔵塔があり、そこから大観音や写経塔へはなだらかな道となつて、三百米程である。

多くの人は大観音へ、私達は弁当を車で運搬してもらう様に頼んでおいて、ぶらぶらと歩いて行つた。大観音の前には、吉田篁堂、岡田史洞、霜田一笠、岩井柳月君等、夫妻で参列された方が遠くから見えたが、着いてみると居ない。

弁当を使うべく山の小屋に入ると、どのテーブルも、関係者が占めている。おでんとビールで乾盃、こう云う時車の運転を受持っている人はお気の毒だ今日は車で来なかったという佐藤雲亭君は、安心した面持で飲み且つ語っている。

私達はそこから引返し山の近道を歩いて下った。



西遊記

(其の三三)

岡部千三

独角大王 (前号より)

水徳皇は、川幅の広い川の中に、その小さいはちを入れた。するとどうしたことか、川の水の半分がみるみるうちに、はちの中に流れこんでしまった。「どうです。水がこれだけあれば、独角大王も、それからしてしたどもも、みんなおしながすことができるだろう。」

「なるほど、なるほど、これならうまくいきそうですね。ありがたい。」

悟空はいさみたって、水徳星を独角大王のやしきの門前にあんないをした。

門の扉は大きな石で積み上げた、見るから、がんこな石のわくに、厚い板の平戸二枚が合わさって、かたく閉ざされていた。

げんこつ仕合

独角大王は、ゆだんのできないあいてと、すでに二ど三ど、しっばいした、悟空はきんちょうした。よし、こんどこそ充分の注意と、思いきった手で、かからなければならんと決心した。

敵の独角大王が、まだやしきの入口門をでないうちに、どっと水を流しこんだなら、いくら独角大王でも、たちまちおぼれ死んでしまうだろうと思った。そこで門につくなり、悟空は大声をはりあげた。

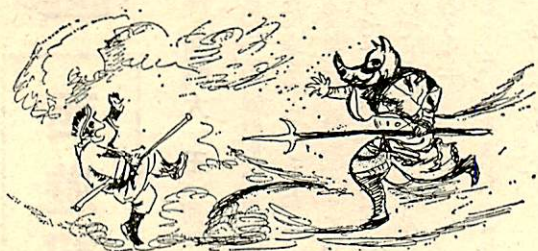
「独角大王、またおれさまがまいったぞ」
そういつておいて、

「それっ、水」

すぐに水をむけたが、それよりも一足さきに独角大王がおどりでてきたのである。手にもった白い輪を、ぱっと空へなげあげたかと思えるまに、水はやしきのうちに流れないで、あべこべに悟空たちの立っている足元へいきおいよく洪水のようにおしよせてきた。

悟空は、あわてて雲を呼び、高い山の上に逃げた
仲間のものもそれにつづいた。

「いったい、これはどうしたことだろう。あなた
をたよりにしていたのに、これではこちらが水ぜめ
になりますよ」



「やあどう

も、まことに
すみません。

水を出すこと
だけは知って
いても、とめ
かたがわから
ないものです
から」

水徳星は、
あたまをか
いていった。

独角大王の
やしきでは手

下どもが、手に手に武器をもち出して、これみよが
しに武術のけいこをはじめた。

山の上から、そのようすがよく見えた。

「ええいっ。武器がだめ、火がだめ、水がだめな
らそうだ、これでいけ、悟空さまのげんこつのかた
さを知れっ。」

悟空は、ただ一人、こぶしをふるって敵の中へお
どりこんでいった。

「ほうっ、げんこつできたか。げんこつならここ
らの方がすこし大きいぞ。」

独角大王は、ぽーんと槍をなげすてて、こぶしで
むかってきた。

こぶしと、こぶしのぶつかりあい、なぐりあい。
火のでるようなげしいあらそいになった。

たたかいながら、あいてのすきを見た悟空は、か
らだの毛をひとつかみぬきとって、

「かわれっ」と一声。

毛は小ざるになって大王にとびつき、ひっかくや
ら、かみつくやらでさわぎになった。(以下次号)



田舎医者(其の二十)

見川 鯛山

鱒(つつぎ)

蛭田糸吉は「畜生め!! 畜生め!! どこさ行きゃ
がっただ!!」

叫びながら、川を駆け、岩を蹴とばし、血走った
目で速い流れを空しく追った。

そのずっと下流で、お坊様は一人静かに釣糸をた
れていた。そして、ふとお坊様は見つけたのだった
手負いの力つきた大鱒が、白い腹を横たえて彼の足
もとにポッカー浮かんだのを……!!

お坊様はあたりをキョロキョロと見廻し、そつと
それを拾いあげると、竿を担いでコソコソと逃げた
だがその動きを、遠い上流から糸吉の鋭い目が見の
がさなかつたのだ。

「待てっ」

彼は大声で叫び、岸に跳びはね、石ころをけとば
しながらダンブカーのように突進していった。

「泥棒、鱒ドロボウ待てっ!!」

お坊様は重い大きな鱒をぶら下げ、三間の釣り竿
を右にゆさぶりながら、短い脚で忙しく走った。

石ころにつまずき、岩苔に滑り、息切ればかりし
てくるしかった。

やがて二人の距離がみるみるうちにつまってきた。
た。

猟師の投げたヤスは、もうお坊様の首すじに一寸
の狂いもなくとどく近さであった。

間一発、そこに大きな岩があった。そしてお坊様
がバツと、向う側にかくれた。

「やいっ泥棒!!」

岩の手前で三又ヤスを振りかざし猟師がどなった
「もう観念しろ、逃げたって無駄だぞ、さ、その
魚こっち放りれ、そうすりゃ今度だけ勘弁してやる
さ早くしろ!!」

だが返事はなかった。

「何をぐずぐずしてるだ、さっさとやれ!! 俺ア
おめえを勘弁してやるんだぞ、名前もきかねえ顔も
見ねえで逃がしてやんだぞ。だから魚だけアかえ
せ、ここさ、ぼーんと放り投げてよこせ」

でもやっぱり返事も魚もはね返って来なかった。

「おめえそんなに怖がらねえだっけいいだぞ。俺
アこれでも気はやさしい方だ。魚が重くて放られね
えだらそこ置いてけ、そしてさっさと家さ帰れ二
度とこんなこと、すんでねえぞ、いいな!!」

喋りながら、ふと糸吉は見つけたのだった。はる
か遠い土手を小男の盗っ人が鱈をぶら下げ、釣り竿
をゆさぶりながら、馳け登って行くのを……

再び追跡が始まった。新たな怒りが猟師をかり立
て、彼は野牛のような唸り声をあげ、砂利をけちら

し、大ヤスを振りかざしてばく進していった。土手
をとび越え、田圃の畦道にかかるころ、又もや彼等
の距離がちぢまった。中学生の詰襟服を着た小さな
お坊様が、細い畦道をチョコチョコ渡ると、その後
をドタバタと地ひびきたてて赤鬼が追った。

「畜生めが、こん畜生めが!!」

赤鬼がいきり立つと、大きな足が狭い畦を不器用
にふみはずし、べたつと泥田へ四ん這いになり、そ
の度に鬼のフンドシがゆるんだ。そしていつの間に
か、糸吉の泥だらけの性器がそこからはみ出し、か
け足に合わせて鯨のようにゆれた。

「こらっ!! 生まれ、止まらぬとヤスを投げるぞ」
すぐ後で猟師が怒鳴った。するとお坊様はもう背
すじに痛みすら感じ、首をすくめ、釣り竿を振り廻
しながら必死で走った。

シュー!! 風を切って糸吉の三又ヤスが飛んだ。
ヤスはお坊様の頭をかすめ、その目前でぐさっと
狭い畦道の真中に突き刺さり、お坊様が釘づけにな
ってしまった。

大鐘樓建立協賛者芳名

(第三号)

敬称略

五〇千円	浦和	藤沢	帝	式〇東京	高木	菊三	式〇飯能	島崎石材店	式〇竹寺	大野	亮雄	式〇東京	今井	豊子	式〇青梅	富田	秋夫	式〇草加	吉原	強	式〇名栗	田島久太郎	式〇飯能	武居	藤吉	式〇青梅	荒井	多一	式〇所沢	小高	保平	參〇	中里	勇吉	參〇東松山	大木自動車工業(有)	五〇	福島	宗賢	五〇東京	吉崎	弘	五〇名栗	有馬	忠直	式〇	〃	小峰	久治
五〇熊本	水足	ヨシ	式五鎌倉	宗像	玉子	式〇飯能	武居	藤吉	式〇	〃	小林	頼四	式〇東京	上田	花子	船口	暉子	參千葉林	俊雄	參秩父	鈴木	峰堂	五東京	石原嘉一郎	五横浜	松沢	戸山	五名栗	松下	愛吉	五青梅	中島	照雄	參〇横滨市	坂口	清博	參名栗	岡部	佳樹										

壹〇名 栗田島久太郎	貳〇所 沢小高保平	参千葉県 林俊雄	五東京 石原嘉一郎	五横浜市 松沢戸山	参名栗 石井晟助	壹〇草加市 吉原強	参〃 細田伴次郎	参飯能 浅見昌一郎	参名栗 加藤辰作
五〇川口市 飯塚孝司	貳〇北区 高木菊三	壹〇飯能 小林頼四	壹五鎌倉市 宗像玉子	壹五熊本市 水足ヨシ	壹〇〃 滝田トキ	壹〇練馬区 下田龍次	貳〇青梅 小峰久治	貳〇青梅 荒井多一	壹〇飯能 武居藤吉
五〇袋井市 原田亮裕	五〇大阪市 辰野彦一	参越生町 畑くじ	五〃 並木和夫	五所沢 金金寅吉	五〇台東区 清水谷恭順	五飯能 福島宗助	壹五所沢 萩原清	壹〇世田谷 船口暉子	壹〇新宿区 上田花子
壹	貳	参秩父市 篠田小夜子	五青梅市 中島照雄	五〇千代田 平岡仙一郎	壹〇所沢 佐藤やす	参名栗 本橋義治	貳〇〇朝霞市 広瀬秀雄	壹〇飯能 双木利夫	壹〇名栗 町田真之亮
参壹名	二九名								

老万體 觀音奉安者芳名

昭和五十二年二月現在

称敬略

練馬	岡部	大宮	名栗	相模原	府中	富士見市	滝野川	川越	練馬	青梅	日高町	横浜	住所
深谷	篠崎	芝橋	高田	町田	平片	高橋	三浦	並木	渡辺	脇本	浜野	平山	芳名
起代	歌藏	房操	子一	わか	之績	治善	八正	外一	日海	浦老	青和	高崎	住所
浦和	新宿	練馬	新座	川越	名栗	調布	青梅	練馬	津中	星里	中野	佐野	芳名
井上	高橋	下田	下田	竹内	枝久保	飯井	加藤	津中	安子	綾野	野一	益男	住所
静江	龍次	武男	とみ	良一	雄生	貞治	宗八郎	外二	安子	綾野	野一	益男	芳名

村山	池袋	川越	練馬	大田	日高	名栗	住所
乙幡	乙幡	中島	高橋	河原	田原	森中	芳名
信雄	榮吉	英利	ま利	トキ	外一	長太郎	住所
BA	本	前	總	新	狹	日	東
号	号	号	計	宿	山	高	村
八	八	五	八	区	市	町	山
二	一	四	七	石	坂	小	浜
九	八	七	二	井	本	谷	野
				惠	庄	憲	光
				美	平	成	貞
				子			の

般若心經納経者芳名

昭和五十二年二月現在

敬称略

鈴木弥重子	関八朗	武石許子	武石千代	大竹和子	平沼とみ	平沼弥太郎	住所
四原	二〇二	外一	外一	二〇	七五	七五	芳名
多喜	若林	松本須美子	松本須美子	新開フサエ	田辺	湯沢	住所
五的馬美千子	早野	二本間	持田三	五十嵐雅昭	一五	長岡	道子
六	二	六	九	三	四	二	二

山本すみ子	一五	阿部よ志子	二	総計	八、五四六
関八朗	一〇〇	杉山和江	二	前号	七、七六八
武州印刷業員	二	山崎果汀	三	本号	七七八
平沼とみ	二〇	持田良子	外一〇	写経折本	壹巻
武石許子	一六	佐藤勉	外一三	一、金壹千円	

○参道大燈籠奉安者芳名 (敬称略)

大鐘楼建立記念

東京 壹基 小川 勘兵衛

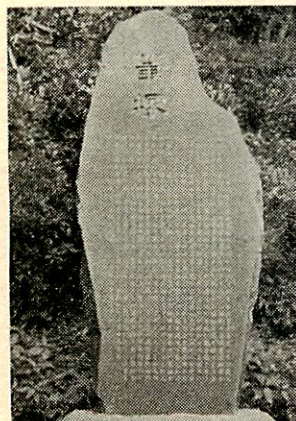
同

所沢 壹基 所沢観音講北中講中

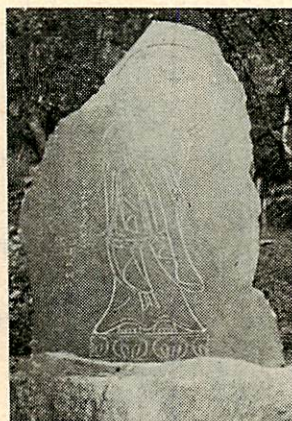
○ありがたや三十三観音奉納

奉納者 平沼 桐江 敬称略

三十三観音と云われても、そのまとまったものを見た人も、知っている人も少ないと思いますが、この度、平沼桐江先生の力作によって三十三観音が全部完成して、奉納いただいております。只今救世大観音の堂内に柵を以て安置してありますが、台座を完成いたしその後開眼式を修行いたす予定です。もう毎日おどろぎと、ありがたさで一杯です。



高さ1.8米 幅1米
本堂下奥の植込の中
筆塚



高さ1.8米 幅1米
本堂右の植込の奥
魚らん観音

奉納された式碑

魚藍観音奉納 平沼桐江
筆塚同 平沼とみ
(敬称略)

鳥居観音だより

終了した行事（八月末まで）

大鐘楼落慶式 五月十四日（土）晴天

午前十一時、花火を合図に式は開始された。鐘楼を囲んだ紅白の引幕は風にそよぎ、式場の正面に設けられた壇場には五果山海の品品が供えられ、しゅ木につけられた紅白の引綱が腫をひいた。

導師は当山尾尻老師を中心に村内五寺院の住職各位の随喜によって修行された。

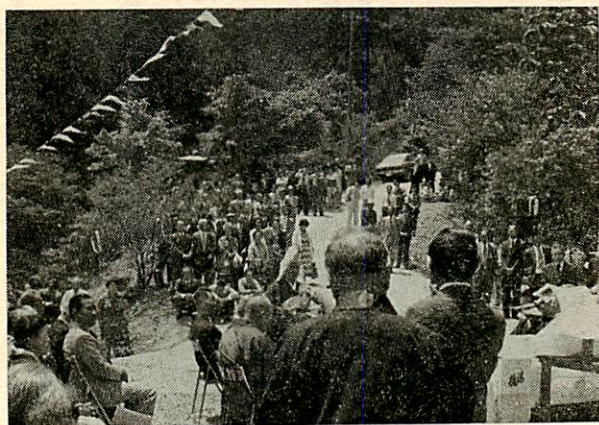
参列者席には開祖平沼先生夫妻を始め、講元各位の顔が並び、両側に御泳歌奉泳に來山の青梅からの一団と名栗の一団が座しておられた。

花火の早打ちが玄奘三蔵塔の広場から、次々と打ち上げられて、導師の法語も打ち消されるかのようであった。

参列者は六百名を越えたので、一般の自動車の入山は一時止めて専用車のみが運行した。いよいよ撞初めとなり、発願者平沼先生夫妻から導師、役員一般の順に鐘は撞かれた。



鐘楼落慶式場正面



式場から参道にあふれた参列者各位

鐘の音は折からの薫風によつて、谷を渡り山を越えた。

一同の感動は等しく、禅即ち明心達理の境だった

五月十五日(日) 雨 駒込、小川勘兵衛、西早稲

田、梶川恵一ご両氏参拝奉納あり、入山者多数

五月十七日(火) 晴 江古田老人クラブ一行の来

山、庫裡にて接待す 外七〇名

五月二十一日(土) 晴 日本火災海上保険(株)の

物故者慰霊祭執行、参列者右近社長外一五〇名、導

師は尾尻老師、有馬、鯨井両老師随喜さる、

平沼先生夫妻も列席されて厳肅盛大に終了

五月二十二日(日) 曇 狭山市入曾宮岡様外二十

名来山、奉納あり 一般来山一〇〇名

五月二十三日(月) 晴 所沢市保育園々児一五〇

名来山 外多数

五月二十四日(火) 曇 川口市飯塚孝司様夫人来

山ご奉納あり 二二五名来山

五月二十八日(土) 晴 所沢講元小山様の引卒で

三十名バスで来山、奉納あり

六月五日(日) 晴 川越旭町森田悌二氏の引卒で

老人会来山 五五名

六月七日(火) 曇雨 平沼先生夫妻来山 外五八名

六月八日(水)晴 川崎、宮田留吉様外二十五名
来山 外バスで来山一五〇名

六月十二日(日)曇 杉並区江崎元堂夫妻来山

六月十三日(月)晴 埼玉トヨベツト講元梶谷様
扱による塔婆施餓鬼の申込三五二の申し込あり

六月十五日(水)曇 台東区清野様外多数の塔婆
受付す 五〇名

六月十七日(金)雨 朝霞、広瀬秀雄様来山

六月十八日(土)雨 池袋、中島様壱万體二体及
写経折本申込受 来山者九五名

江東区寺尾長吉様外九名塔婆供養申込受

六月二十一日(火)曇 午前十時から庫裡にて監
事会を開く出席、武居藤吉、平沼幸一両氏出席午後
一時責任役員会を開き昭和五十一年度決算報告説明
の後、監査報告を武居監事よりされて、無事に役員
会終了する。

六月三十日(木)曇 護持役員、水上様来山され
塔婆供養申込と、平井、田辺両氏よりも多数あり

七月二日(土)曇練馬区高橋様壱万體奉納

七月四日(月)晴 福生市今村様狭山市六本木様
来山奉納あり 来山四五名

七月五日(火)曇 入間市原様夫妻来山奉納あり

七月六日(水)晴 羽村町宮沢様より多数の塔婆
供養申込あり、其他写経折本愛者多数

平沼先生夫妻来山 来山バス三台
七月七日(木)晴 川越原田様より塔婆供養申込
多数あり 来山バス二台

七月八日(金)曇 坂戸市若松様より塔婆供養申
込多数あり壱万體申込東村山市浜野様

七月十二日(火)晴 三鷹本村様 大泉滝田様
所沢齊藤様より塔婆供養申込多数受付

七月十三日(水)晴 朝霞広瀬様より塔婆供養多
数申込受付 来山七八名

七月十四日(木)晴 日高町小谷様壱万體申込、
塔婆供養準備を救世大観音堂内に行う。

七月十六日(土)晴 塔婆施餓鬼供養、午後二時
救世大観音堂内にて修行、導師尾尻老師其他二人、
参列者広瀬秀雄、水上、清野、滝田、松本の各位

七月十六日(土)曇練馬区高橋様壱万體奉納

七月二日(土)曇練馬区高橋様壱万體奉納

七月二十三日(土)晴 関東ブロック林業種苗組合連合会総会飯能会場に出席の方方二百名来山、徒歩や、当山の車利用で見学、白雲山内の美林を見て償めておられた。後一同は秩父へ

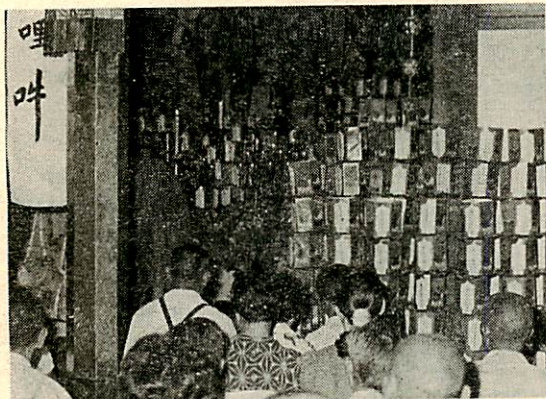
七月二十五日(月)晴 流灯法要の案内状発送秩父方面から名栗に入る地点に当山の看板を立てる
狭山市笹井に鳥居観音の看板を立てる
青梅市下成木坂下に同看板を立てる。

八月十六日(火)雨 午後四時流灯法会

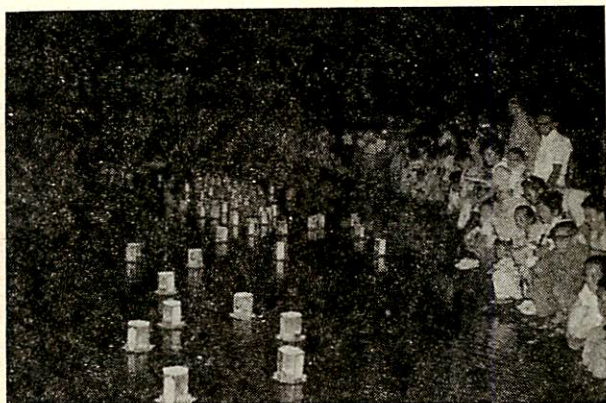
連日の雨だが、せめて今日だけはと願いはかけたがついに晴れなかった、午前中、平沼先生夫妻来山つづいて板橋の大山講元榎本みや子様引卒、バス一台瑞穂町の鈴木様外三〇名、川越新友講元斉藤様バス一台、広瀬、江崎、新妻、小久保、埼玉トヨベツト平沼社長、梶谷副社長の各位、信男信女多数列席千数百の流灯はおごそかに供養されて夕刻をまった。

夕暗せまる雨の名栗川原に運ばれた、流灯には次ぎ次ぎと灯が入れられ、増水した名栗川の急流にのって、精霊はお帰りになった。

今年の夏は天候の異変と云うか、七月の下旬から三十度を越す暑さとなって、夏休は海へ山へレジャーをたのしむ人がくり出したので、海も山も満員だと報道された。しかしそれも八月八日から降りはじめた雨がお盆までつづいて、当山の流灯法要もこの

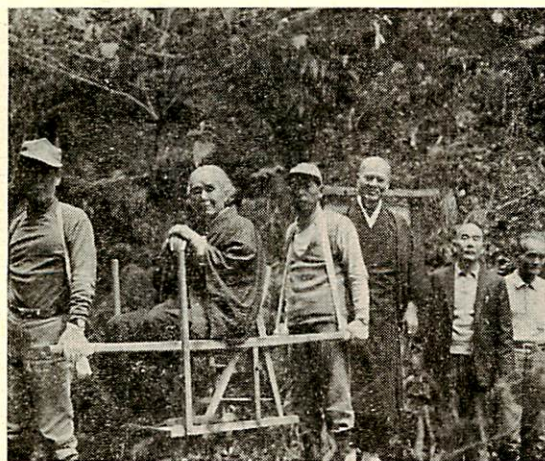


ために多くの方達にごめいわくをおかけした次第、折角お越しいただいたのにどうすることもできず流灯を代行した。
その長雨のために名栗川は増水し



るようだった。話しによると、仏様はこの盆に供養されて、流灯にのって天へかえられるのだと云われている、心ある信仰者はうなずかれるであろう。

て、清流とは云いながら、急流のために灯ろうはたちまち下流の方へ流れ去った川瀬の音と、読経の音が和して夕暗の川面に灯る明りは何とも云えない風情で、この状景をみる人はおごそかそのものの心情であられ



当日ご来山下された方は雨天のため何かとご満足行かなかったことと存じます。どうぞ来年こそよい天気にくぐまれますして執行できますよう今からお祈りしております。今後どうぞよろしく。

開祖平沼先生（号桐江）白雲山内一巡

先生は月に一度は、白雲山内に入られて最近の写真のようなおかごで、管理の状況など

親しくごらんになって、指導や注意をしていただいております。

魚藍観音の碑を建てる所はどこがよいか、見晴しに邪まな木はないか等実を目を利かされます。

そして一木一草、一塔一門その管理方法について指導をしていただきますが、こうした点でも一般人とちがったものをおもちなので、心から敬服しております。

考案のおかごにゆれて秋の靈山^{うま}

これからの主な行事

○紅葉狩り 十月二十五日から十一月二十五日まで
年毎に紅葉はすばらしくなります。どうこの期間にご参がてらご探勝下さい。

○秋季例大祭 十一月十七日 恒例により修行します。紅葉もまだ見られますのでご参拝下さい。

○大黒祭 十二月十日 大黒殿 十時半

○大みそか除夜の鐘 午後十一時 大鐘楼 初めての除夜の鐘が撞かれます。ご参列下さい。

夏 雑 詠

朝朝に詣でる夏の山涼し	倫一郎
本堂の前庭おおい百日紅	松次
鶏頭の濃淡庭に陽を吸えり	滴水
木犀の大樹頭上に香を放つ	狂句朗
泉水に秋海どうの花うつる	霞山
流灯は早瀬に乗りて下りけり	好螢
合掌をして流灯に灯を入れぬ	とし子
流灯や名栗川畔に人の垣	秋月
流灯会黙して送る浴衣人	千昭
在りし日の人偲びつつ流灯す	同人
梵鐘をならして下る萩の道	正春
雨つづき苔の花咲く奥の庭	正義

とりの 第四十号 発行日 昭和五十二年十月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
発行人 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社
印刷所 鳥居観音 電話 ○四二九七―九一〇四一七
発行所 鳥居観音 電話 ○四二九七―九一〇四一七

白雲山

鳥居観音
観世音センター
案内図



秋 の 行 事

●紅葉狩り 10月25日～11月25日

全山紅葉と緑の調和が目を慰める

天下の美観出現

●秋季例大祭 11月17日 10時30分

●大黒祭 12月10日 10時30分

新 年 の 行 事

●昭和53年元旦祈禱 1月1日～3日

12月から祈禱申込受付開始案内状発送

願 旨 家内安全 商売繁昌

交通安全 諸願成就

安 産

祈 禱 料 金1,000円 2,000円 3,000円以上

御申込先 埼玉県入間郡名栗村

白雲山 鳥居 観 音

電話 04297-9-0417